

群 教 七	F08 - 01
	平 27. 257 集
	生徒指導

児童の自己有用感を高め、 お互いを認め合える学級づくりの工夫

— 気持ちを伝える『ありがとうの木』と

家庭と連携した『メッセージカード』の活用を通して —

特別研修員 荒井 敏明

I 研究テーマ設定の理由

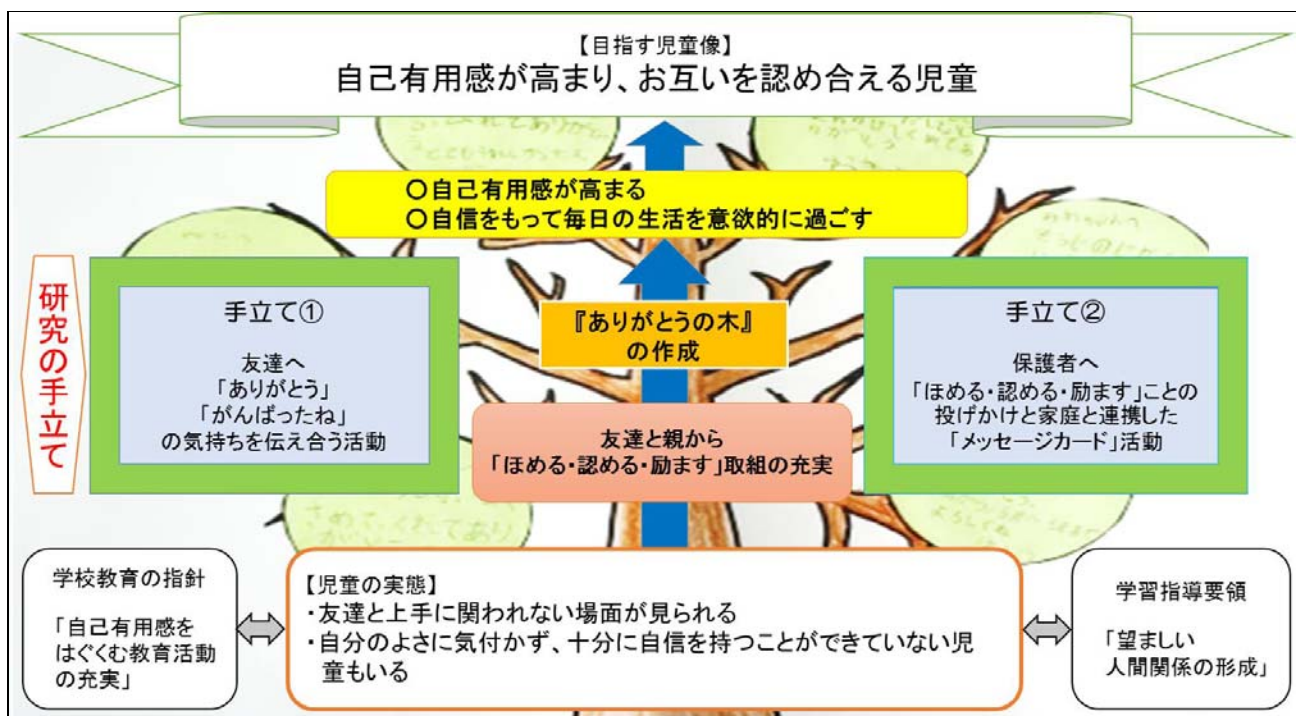
小学校学習指導要領において、学級活動の目標は、「学級活動を通して、望ましい人間関係を形成し、集団の一員として学級や学校におけるより良い生活づくりに参画し、諸問題を解決しようとする自主的、実践的な態度や健全な生活態度を育てる。」となっている。また、群馬県教育委員会発行の「平成 27 年度学校教育の指針（解説編）」において、「いじめの未然防止に向けた人間関係づくりを進める取組の充実」の中で、「一人一人を大切にしたり分かりやすい授業づくり」や「一人一人が活躍できる集団づくり」など、自己有用感をはぐむ教育活動の充実が求められている。

本学級では、相手の話をきちんと聞けず自分の言い分だけを伝えるなど、友達と上手に関わることができない場面が見られることがある。また、自分に自信がなかったり、他人にあまり関心がなかったりして、他者との関わりを進んで持とうとしない児童もいる。平成 27 年 5 月に本学級の児童を対象に実施したアンケート調査では、「自分の長所や得意な所を自分で気付いていない」「周りの人に普段からあまりほめられたり認められたりしていない」という回答が多かった。

そこで、このような児童に対して、頑張りを認めたり、肯定的なメッセージをもらったりする活動を計画的に取り入れていくことで、児童一人一人の自己有用感を高め、自分に自信を持つことができるようにする。このことは、お互いを認め合い、支え合うことができる学級づくりとなり、さらに毎日の生活を意欲的に過ごすことにもつながると考え、本研究テーマを設定した。

II 研究内容

1 研究構想図



2 授業改善に向けた手立て

(1) 目に見える形で、友達に「ありがとう」「がんばったね」の気持ちを伝える活動の設定

- ① 実践1では、友達に助けってもらったり、手伝ってもらったりしたことに対する「ありがとう」の気持ちを伝え合う活動を行う。
- ② 実践2では友達が運動会で努力していたことに対する「がんばったね」の気持ちを伝え合う活動を行う。

友達の良いところを見付け、感謝の気持ちを伝え合う活動を行うことで、児童の自己有用感を高め、お互いを認め合う学級ができると考えた。児童が書いた「葉っぱシート」は『ありがとうの木』に掲示し、いつでも目にすることができるようにする。

(2) ほめたり励ましたりする子どもへのメッセージカードや、コメントを書いてもらうワークシートなどの工夫による家庭と連携する機会の設定

- ① 夏休み中、児童の家庭での生活の様子を見て、夏休みの生活のめあてに対して頑張っていたことを「葉っぱシート」に記入してもらう。
- ② 実践2では、運動会での児童の頑張りに対し、ほめたり認めたり励ましたりする内容の手紙を保護者を書いてもらい、それを授業で各自が読む活動を行う。

児童の自己有用感を育むためには、学校生活だけでなく家庭での生活も影響していると思われる。そこで、家庭と連携して児童の活動や考えに共感し、「ほめる・認める・励ます」ことを意識して行ってもらえるように投げかけていたり、家庭と連携した活動を取り入れていたりすることが必要であると考えた。

保護者を書いてもらった「葉っぱシート」は、児童のものと同様に教室の『ありがとうの木』に掲示し、いつでも目にすることができるようにする。

Ⅲ 研究のまとめ

1 成果

- 友達からの「葉っぱシート」や保護者からのメッセージである手紙をもらい、周りからの肯定的な評価を受けることで、児童同士で友達の高さや個性を認めて自己有用感を高めたり、周りの友達に対して優しい発言が増えたりする場面が多く見られるようになった。
- 「ありがとう」や「がんばったね」の気持ちを伝え、認め合う活動を通して、達成感や充実感を得たことで、係活動や清掃など、その他の活動や行事でも友達と協力して意欲的に活動する姿が増えた。
- 学校からのみでなく、家庭からも同様に「ほめる・認める・励ます」という活動を行ったことが、児童の自己有用感の向上に大きくつながり、落ち着いて学校生活を送れるようになった。
- 保護者の方に協力を依頼し手紙を書いてもらったり、学級通信を通して学校での取組を繰り返し紹介したりした結果、家庭で宿題等を見てくれる保護者が増え、学習面でも良い効果が認められている。

2 課題

- 授業中だけでなく普段の生活の中でも、互いに認めたり、励まし合ったりする姿が広がってくるようにする必要がある。新たにグループ交換日記「きずな日記」を行い、友達が書いた日記に対しコメントを書き込んだり、「みんなへ一言」を書いたりしている。また、保護者にも書き込みをお願いし、児童と保護者でのメッセージ交換も普段の生活の中で行えるようにしている。
- 今後、友達とより良い関係づくりをしていくために、ソーシャルスキルトレーニングを取り入れ、人と関わる回数を増やしたり、人との上手な関わり方を学んだりしていくことが必要であると考えられる。

<授業実践>

実践 1

1 題材名 「『ありがとうの木』をつくろう」 (第4学年・1学期)

2 本題材及び本時について

本題材は、毎日の生活の中で友達に手伝ってもらったり、声をかけてもらったりしたことを振り返り、そのことを文字に表し友達に伝える活動である。クラス全体でありがとうの言葉を書いた葉を増やし、それを『ありがとうの木』として作成し、教室に掲示する。クラス全体で『ありがとうの木』を作るとともに、個人用『ありがとうの木』ファイルも作り、一人一人の『ありがとうの木』の「葉っぱシート」も増やしていくようにする。この活動は、自分は一人ではなく、クラスの仲間に支えられて生活をしていることに気付いたり、友達から感謝されることで、自分のことを肯定的に捉えられたりするようになることをねらいとしている。このことを踏まえて次のように手立てを具体化した。

- 普段の生活で、自分の気持ちを言葉にするのが得意でない児童も、友達に気持ちを伝えられる場を設定する。
- 友達から気持ちを伝えられることで、満足感を得て自分自身を肯定的に捉えることができる場を設定する。

3 授業の実際

事前指導

学級活動の時間、「どんなクラスが居心地がよいか」について話し合い活動を行った。その結果、「ありがとう」「がんばったね」等、友達をたくさんほめたり認めたりできるクラスにしたいという意見が児童から出された。

事前指導で、「ありがとう」の気持ちがたくさんあるクラスが良いクラスだという話し合い活動をしたことによって、「ありがとう」をクラスの中に増やしていきたいという児童の想いが高まった。その上で、実践1の授業を行った。

(1)「ありがとう」の気持ちを伝え合おう。

本時の授業は、事前指導の話し合い活動を受け、「ありがとう」の気持ちを伝え合おうという授業である。

めあて：「これまでの生活を振り返り、ありがとうの気持ちを伝えよう」

場面：休み時間、掃除当番、給食当番、授業中、登下校など

書き方：ありがとうの気持ちだけでなく、その時の自分の気持ちも書く

図1のような用紙(以下、「葉っぱシート」)にありがとうの気持ちを書いた。中には、友達のよさに気付かず、なかなか「葉っぱシート」に書けない児童もいたが、ありがとうの気持ちでも良いと声をかけたところ、ありがとうの気持ちを書くことができた。そして、書いた「葉っぱシート」を友達に手渡した。

児童の振り返りには、

- S1 「友達のありがとうの気持ちがうれしかったです。これからもよろしくね!と書いてあったので、本当に気持ちが伝わってきました」
- S2 「みんなに気持ちが伝わっているのか不安だったけれど、わたしたときにニコニコと笑ってくれたから良かったです」
- S3 「あんまりありがとうの気持ちを書けなかったです。でも、紙を渡したときスッキリしました」などの意見があった。

「葉っぱシート」に書く内容について、単に「ありがとう」の気持ちだけではなく、自分の気持ちや次

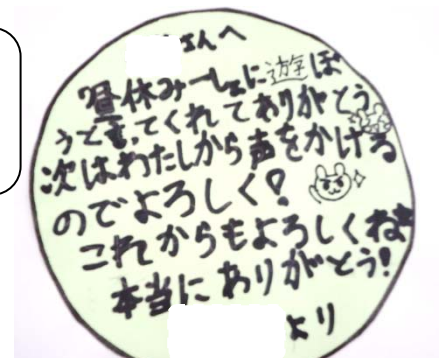


図1 「ありがとう」の気持ちを書いた
葉っぱシート

にどうしたいかについても書くようにした。その結果、「心の底から明るい気持ちわいてきた」「私のことをこんな風に思ってくれてうれしい」「これからも仲良くしていきたい」「これからも友達のうれしくなることをいっぱいしたいと思います」等の、次へのめあてにつながることを書いている児童もいた。

また、S3のように、友達に「ありがとうの気持ち」を伝えることが苦手な児童や、はじめは「ありがとうの気持ち」を書くことに抵抗がある児童もいた。そして、「葉っぱシート」を渡す際には、恥ずかしくて目を見て渡せず、黙って机の上に置いてくるといった場面もあったが、渡した後はさわやかな笑顔で満足そうにしている表情が見られた。

友達からもらった「葉っぱシート」は、個人用『ありがとうの木』ファイル（図2）に貼った。また、同様に教室の後ろの壁にも『ありがとうの木』（図3）を作り、いつでも目にすることができるようにした。

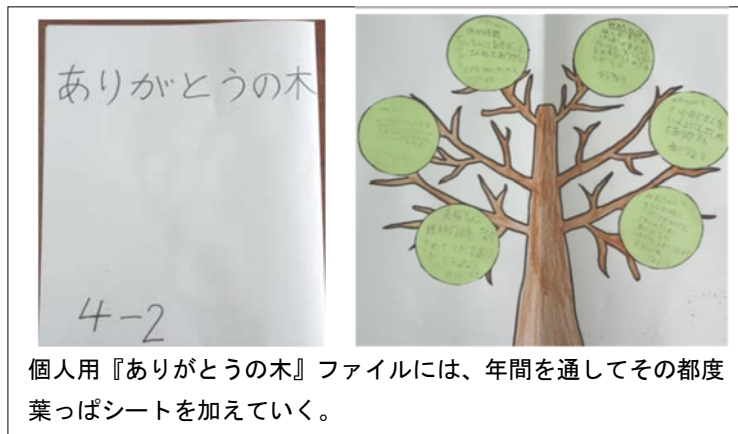


図2 個人用『ありがとうの木』ファイル



図3 教室掲示用 『ありがとうの木』

4 考察

- 「ありがとう」「がんばったね」の気持ちを友達に伝え合う活動をしたことによって、日常の中でも「ありがとう」「がんばったね」の気持ちを意識して生活する児童が増えてきた。また、もっとカードを書きたいと申し出てくる児童もいた。この活動後、児童にアンケートを取った結果、「ありがとう」の気持ちを友達に伝えるようになったと答えた児童は、25人（78%）であり、また、友達の良いところを見つけようと思うようになったと答えた児童は、32人（100%）であった。
- 授業後に、保護者からも子どもの変容についてのアンケートを取った結果、「友達にほめてもらってうれしかったよ。と言っていた」「弟や妹に優しくなった」等の感想をいただいた。また「家庭での関わり方についても考えさせられます」「家庭でもありがとうの言葉を意識して使っていきたい」との回答もあった。
- 「ありがとう」の気持ちをなかなか書けなかった児童や、友達から「葉っぱシート」をもらった感想を書けなかった児童は、他者から認められることが他の子に比べて少ない児童が多かった。これは、素直に喜ぶ気持ちや感謝の気持ちを表すことに抵抗があったり、他人を肯定的に見ることができなかつたりするからだと思われる。友達から「葉っぱシート」をもらったときは、ニコッと笑顔をみせる瞬間もあったので、このような活動を継続し、自分を認めてもらう回数を増やすことによって他者を認められるようにしていく必要があると考える。また、児童の振り返りを見ると、「気持ちがうまく伝わりと良いな」「なかなか書けなかったけどスッキリした」等、伝えたいけれど伝えられないといった思いもあることが分かった。
- 児童の自己有用感を育むためには、学校生活だけでなく家庭での生活の様子も影響していると思われるので、家庭とも連携して児童の活動や考えに共感し、「ほめる・認める・励ます」ことを意識して接してもらえるように投げかけていく必要があると思われる。例えば、児童が立てた目標への取組に対しての励ましやサポート、運動会や音楽会などの頑張りの様子をほめてもらうなど、児童が努力したことに対して認めることで、自信を持ち、次への意欲へつながっていくと考える。

実践 2

1 題材名 「運動会大成功作戦」 (第4学年・2学期)

2 本題材及び本時について

本題材は、運動会に向けて毎日の練習の様子を振り返り、友達が運動会本番に向けて努力していたことに対して、「がんばったね」の気持ちを伝え合う活動である。また、同時に親から当日の頑張りや家での練習の様子を含めた子どもの頑張る姿に対して手紙形式でメッセージをもらい、親からほめられたり認められたりする機会を設定したものである。「葉っぱシート」は実践1と同様、教室にある『ありがとうの木』に掲示していく。この活動は、友達や親からほめられたり認められたりすることで、自分のことを肯定的に捉えることができるようになることをねらいとしている。このことを踏まえて次のように手立てを具体化した。

- 友達や親から「がんばったね」の気持ちを伝えられることで、達成感や充実感を得て自分自身を肯定的に捉えることができ、次の活動への意欲を高める場を設定する。

3 授業の実際

事前準備

- 1 運動会に向けてのクラス目標と個人目標を立て、毎日練習に取り組ませるようにした。
- 2 運動会までの間、グループ練習を多く取り入れ、友達同士で見せ合ったり教え合ったりする場面を多く取り入れた。
- 3 保護者の方に、運動会までの家での練習や運動会本番での頑張りの様子に対して、「がんばったね」の手紙を書いていただくことを依頼しておいた。また、2名の方にはビデオ出演も依頼した。

(1) 児童同士での「がんばったね」の「葉っぱシート」の交換

運動会における取組について振り返り、友達への「がんばったね」の気持ちを「葉っぱシート」に記入して送り合う(図4)ことで、目に見える形で友達に気持ちを伝える活動を行った。

児童は、友達の頑張りや取組についてよく気付いていて、

S1 「休み時間に何回も、ソーランの練習をしていて頑張っていたね。私もそれを見て頑張れたよ」

S2 「アドバイスとても良かったよ。あのアドバイスのおかげで、つなをひく所がうまくいったよ」

などと記入することができていた。

友達同士で送り合う場面では、実践1での課題点を生かし、クラス全員で上手な渡し方を皆で考え(図5)、もらって嬉しい・渡して嬉しい「葉っぱシート」の交換を実践した。

その際、実践1の時に比べ、児童はよりうれしそうな笑顔で交換することができた。

～「葉っぱシート」の上手な渡し方～

- ①相手の目を見て②笑顔で③一言添えて
- この3点を意識して渡すようにした。



図4 友達と「葉っぱシート」の交換をしている様子



図5 全員で上手な渡し方を話し合う様子

友達からメッセージをもらって、

S1 「私のことをほめてくれるメッセージが書いてあったのでうれしかったです。」

S2 「すごくうれしい気持ちだし、またあげたい気持ちになった。笑顔になれます。」

実践1のメッセージ交換を改善することで、一人一人がうれしそうで、たくさんの笑顔が見られ、互

いによさを認め合い励まし合うことができた。

(2) 保護者から、児童が頑張っていたことを手紙にしたメッセージを受け取る。

まず、ビデオ上映(図6)をし、児童が頑張っていたことを保護者の言葉で伝えてもらった。



図6 保護者からのビデオ視聴の様子



図7 保護者の手紙を読む様子



図8 保護者の手紙を読む様子

次に、一人一人に保護者からの手紙を渡し、児童は封筒を開けてメッセージを読んだ。(図7, 8) 児童は、肯定的な評価によって認めってもらうことで、照れくさそうにしながらも、すごく嬉しそうに手紙を読み、どの児童にも笑顔が溢れ、気持ちがよさそうだった。

保護者からの手紙をもらって、

S1 「ドキドキして少してれくさいけど、お母さんにそう言ってもらえてうれしいです。家に帰ってお礼を言いたいです」

S2 「すごくうれしくて、運動会がんばってよかったなあと思いました。これからも色々なことをがんばっていきたくです」

と感謝の気持ちや次への意欲を振り返りに書いている児童が多くいた。

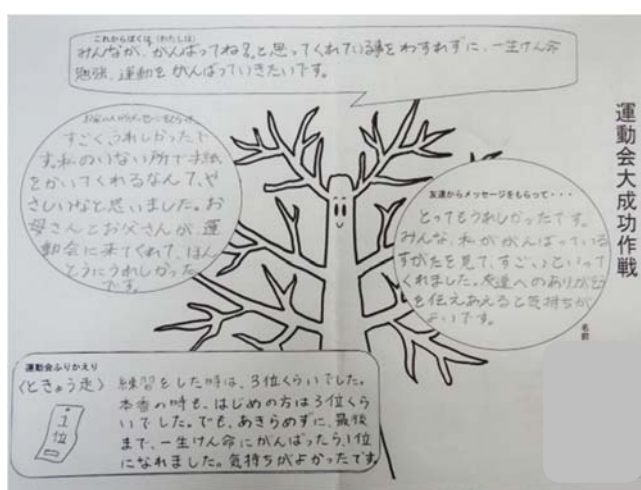


図9 授業で書いたワークシート

根元には、保護者からの葉っぱシートを貼り、児童と保護者が一体となった「ありがとうの木」が完成した。



図10 『ありがとうの木』(完成形)

4 考察

- 授業後の児童の振り返りに、「もらってうれしかった」「気持ちが良い」と書いた児童がほとんどであった。友達の「葉っぱシート」や保護者からのメッセージである手紙をもらい、周りからの肯定的な評価によって、自己有用感を高めることにつながった。
- 友達にメッセージを渡す場面では、上手な渡し方を皆で考えて共有してから行ったことで、もらって嬉しいメッセージの渡し方を互いに行うことができた。
- 運動会後の学年行事に市内合同音楽会があったが、「みんなで力を合わせて良い発表をしたい」というクラス目標を立て、毎日の練習でも意欲的に取り組み、すばらしい発表につながった。
- 保護者の方に協力を依頼し手紙を書いたり、学級通信を通して学校での取組を繰り返し紹介したりした結果、家庭で宿題等を見てくれる方が増え、学習面でも良い効果が認められている。
- 児童全員の自己有用感を高める機会にするためには、「葉っぱシート」をもらえる枚数に差が出ないように、また家庭からの手紙が全員にももらえるように配慮することが必要となる。